

## 老若

子供がすすり泣く声がある  
地面を見つめてとぼとぼ歩く  
電車の汚い床を空缶が転げ回る  
全ては偽善のヴェールと声がある

それら僕の身を切っていたはずの小刀は  
日常性という無感覚の中に空振りし  
塵気楼のようにあまりにぼやけ  
僕は腑抜けのように歩み去り

無味乾燥な生を長らえることは逃亡でなく  
死のもたらすものもピリオドでなく

これが<sup>ひかり</sup>陽光という街だったとは  
苦渋もなく、その代わり抒情もなく

安住と永遠は全てに対する無視によって養われ  
平凡というより恐ろしい麻痺  
僕が求めていた地とはここだったとは  
ああ、出発とう　　だが、何処へ・・・

(1984.12.16)